

研究名：

筋萎縮性側索硬化症患者の呼吸困難緩和に対するモルヒネ投与の有用性についての検討

2013年8月

天理よろづ相談所病院神経内科シニアレジデント 田中 寛大
天理よろづ相談所病院疼痛等緩和ケア対策チーム 久須美 房子
天理よろづ相談所病院神経内科部長 未長 敏彦

筋萎縮性側索硬化症（Amyotrophic lateral sclerosis : ALS）とは、手足・のど・舌の筋肉や呼吸に必要な筋肉がだんだんやせて力がなくなっていく病気です。しかし、筋肉そのものの病気ではなく、筋肉を動かし、かつ運動をつかさどる神経（運動ニューロン）だけが障害を受け、脳から「手足を動かせ」という命令が伝わらなくなることにより、力が弱くなり、筋肉がやせていきます。その一方で、体の感覚や視力、聴力、内臓機能などは保たれることがふつうです。ALS患者さんの5割から9割が呼吸困難を経験するといわれています。呼吸筋の力が低下してくると、十分呼吸ができていない状態が長く続きます。そのため、移動ができなくなる、夜眠れない、不安、食欲が出ない、などの様々な症状がでてきます。これらの症状は、患者さんの生活の質を損ないます。呼吸困難を軽減することで、患者さんの生活の質が向上すると考えられます。

ALS患者さんの呼吸困難の治療には、非侵襲的人工呼吸、気管切開下人工呼吸などが用いられてきました。いずれも、呼吸困難を訴えるALS患者さんのケアとして標準的なものです。しかし、現実には、どちらを選択するのも難しい場合が存在します。

モルヒネは、ALS患者さんの呼吸困難緩和に有用であると考えられており、その使用が勧められています。しかし、まだ一般的に普及しているとは言い難いのが現状です。どのような使い方をすればよいのか、また、副作用対策はどうすればよいのか、まだまだ知見が少ないのが、普及を妨げているようです。2011年9月、ALS患者さんに対するモルヒネの適応外使用が認可されました。それ以降、私たちは、非侵襲的人工呼吸では有効に呼吸困難を軽減できなかった患者さんを中心にモルヒネを使用し、その有用性を実感してきました。モルヒネを使うことで、食事が食べられるようになったり、良く眠れるようになる患者さんがおり、ALS患者さんの生活の質を改善できたかもしれないと感じています。呼吸困難で悩むALS患者さんに対して、モルヒネをどのように使用すればよいのか、どの程度有効なのか、生活の質はどの程度改善するのか、副作用対策はどうすればよいのか、など、今後明らかにしていかなければならない課題はたくさんあります。そこで本研究では、モルヒネの使用法、有用性、副作用対策などについて調査することといたしました。

本研究においては、2011年10月から2013年4月の間に、呼吸困難緩和目的でモルヒネが導入されたALS患者さんの診療録を参照するのみです。したがって、研究のために検査を追加するなど、患者さんの負担となるような行為は行いません。また、本研究の結果が、学会や医学誌で発表される場合がありますが、患者さんの氏名、生年月日、住所その他、個人を特定できる情報は一切公開いたしません。上記条件に該当する患者さんの中で、本研究の対象となることを拒否される場合は、当院神経内科の田中寛大まで御一報下さい。なお、拒否されることで患者さんに不利益が生じることは一切ございません。

連絡先

天理よろづ相談所病院 神経内科シニアレジデント
田中 寛大
電話番号：0743-63-5611（代表）